

手渡され、受け取った生徒から握手の礼をうけました。 女生徒が自発的に、校庭のはずれにある花を折って、山崎さんと私に返礼として差し出してくれました。 その心遣い、心配り、優しさ、暖かさ、純真無垢な、溢れ出る人間性に接し、涙の出る思いがした。 復路は大人数名、小学生6~7名、昨日一緒に来た女子寮生2名と共に、ミアソンに向けて出発。 最後の難所を無事通過すると、もう心配は無いと、小学生4名、寮生2名、大人1名を残して皆帰って行った。 4名の小学生はミアソン迄送ってくれると言う。 帰りは徒歩で2時間余りかけて、アトゥモロックへ。 トラックが前後左右、上下に激しく揺れると、私が振り落とされない様に、横にピッタリと小学生が寄り添って、大きく揺れた時は、私を支えてくれる。 又荷台から降りる時などは、女子寮生が先に降りて、私の手を取って助けてくれる。 何とも優しい心、弱者をいたわる気持ちの現れに感激しました。

アトゥモロックへの道

ミアソンからアトゥモロックへの道は おおよそ車と名の付くものが 走れる道ではない。 最もひどい悪路と言えるだろう。 人間か、牛、馬、獣の歩く道である。 縦に横に斜めに深い溝が走る所、雨が少しでも降ればヌルヌルとスリップする所、洪水後の石がゴロゴロと露出している河原の様な所(石原の方がスリップしなくて好都合)、斜度30度以上の上り坂、下り坂、橋の無い川のある所、トラック1台がやっと通れる道幅の狭い所、片方が鋭い傾斜になった谷がここかしこにある。 トラックは何度も立ち往生するし、最悪の難所は、左カーブの急な上り坂だった。 地表はヌルヌル。 軍用トラックといえども、ここでは無能な車。 そこで、トラックの最先端に取り付けられた、ウインチ(巻き揚げ機)の出番である。(1年程前1部の会員が現地で寄贈した機械)。 ワイヤーを太い立木等に縛り付け、ドラムを回して、トラックを自らの力で引き揚げるのである。 カーブの為ワイヤーを3回、立木を変えて縛り直しをする。 その都度、ワイヤーを 次の立木に 縛り付ける作業が続くのである。 トラックはやっと登り切って自走し始めた。 朝6時に出て9時30分に到着する。 徒歩で2時間余の距離なのに、何と近くて遠い、陸の孤島であろうかと思った。 しかし荷物を運ぶにはトラックが必要である。 加えてアトゥモロックは電気の無い集落で、ケロシンランプが唯一の明かりでした。

雑感

椰子の木

ジェネラルサントス中心街を少し離れた所から、椰子の畑が道の両側に見える。 山崎さんのお話では、この辺りにも、ピラーン族が住んでいたとの事です。 それが 追われて、陸の孤島の様なアトゥモロックに 住まなければならなくなったのです。 私が写真等で見る椰子の木のある風景は、砂浜に1~2本高くはえていて、その下で人が波と戯れる、という南国の風情を漂わせるロマンチックな映像でした。 しかし、道の両側に林のように群生する椰子の木の姿から受ける印象は、強力な侵略者、征服者の化身の様で、恐怖感さえ感じさせます。

そこにはひとかけらの美しさもなく、恐ろしい程 寒々とした風景でした。

ミアソンへの途中は、コーン畑に代わって、パイナップル畑が広がり、アメリカの大企業であるドールでは1ヶ月に20ヘクタールずつ コーン畑からパイナップル畑に切り替える計画の様です。

禿げ山

空から見たミンダナオ島は、痛々しいほどの禿げ山が一面に広がっていた。 これは1960年代に日本が大量の木材を輸入した結果である。 日本は今では、消費する木材の80%を 熱帯林や 北米・シベリヤの